

---

# 生き方難民の証

富崎ヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生き方難民の証

### 【Nコード】

N1424Z

### 【作者名】

富崎ヒロ

### 【あらすじ】

主人公・五十嵐新太は「自分の幸せが分からない」という悩みを持っていた。晴れて高校生になった新太は新しいクラスで双子の天才少女と出会う。その双子は自分達を科学的思考にとらわれながらも「科学を否定し、科学に頼らない生き方」を模索している、「生き方難民」だと言った。そこから「新しい生き方」を目指す難民達の物語が始まるのであった。

## 一章 出会い - 1

「あなたは何をしている時が一番幸せですか？」

新太あらたがその問いに出会ったのは中学二年が終わろうとしている時だった。野球をしている時、サッカーをしている時、本を読んでいる時、普通の人だったらそんな風に答えるだろう。一人でいる時、そんな答えもいいかもしれない。逆に、毎日が幸せだ、という人もいるだろう。だが新太はそうではなかった。この問いが胸に深く刻まれた理由が新太にはあった。

新太にはこの問いの答えがなかった…。

それから新太はこの問いの「答え」をさがした。一生懸命さがした。色々なことをやってみた。しかし「答え」は見つからなかった。この結論に至って新太はまさに言葉通りにその場から動けなかった。新太は別に毎日が不幸というわけではなかった。今まで可もなく不可もなく平々凡々と生きてきた。だからこそ、この問いに出会って今までの自分の人生が否定されたような感じがした。

それからは、新太は方針を変え自分と同じ仲間がいなか一年かけて探し回った。自分に共感してくれる人が欲しかったのだ。

「あなたは何をしている時が一番幸せですか？」

そう聞いてまわった。しかしみんなこの問いの「答え」を持っていた。そして中学を卒業し、高校生となった。新しい環境での新しい生活。ここに問いの答えがあるはずだ、いや、きつと見つけてやる、そう信じて新太は決意を胸に門をくぐったのだった。

## 沢城高校理数科一年教室

そこに取り立てて目立つ特徴もなく、どちらかといえば暗い感じのする男が、これまた取り立てて目立つとは言えない場所に座っていた。今日は新学期の初日。辺りを見渡すと知らない顔ばかり。新太は小さく溜息をついたあと、視線を窓の外に移した。

「ねえ君、名前なんていうの？」

いきなり声をかけられ動揺した新太は

「…五十嵐…新太。」

と小さな声で答えた。

「新太っていうのかあ。オレの名前は秋野シンジ。よろしく。いやー困ったよ、知り合いが全然いなくてさー。このままじゃ一人ぼっちになっちゃうと思うてたところに、いかにも話しかけてくださ似的なオーラを醸し出してる人が見えたからさー。そんな所でじっとしてないでホームルームまで時間あるんだしさ、ちよつと学校の中見て回らない？」いきなりのことで新太は虚を突かれた。

（しかも勝手に身に覚えのないオーラまで出してることになってるし）

とひそかにツツコミをいれつつ、誘いにのるかどうか新太は迷ったが、

（いい人そうだし何もすることが無いし、まあいいか）

と新太は渋々席を立ち秋野と共に教室を出た。

「この学校って頭良さそうな人ばかりだよな。オレみたいなやつは絶対ついていけないよ。特にオレ達のクラスにいる瀬戸内とか言う双子の女子。あの二人は凄いつていう噂だぜ。新入生テストでも一番と二番だったらしいしなー。」

教室を出て廊下の角を曲がりながら秋野が言った。廊下には他のクラスの生徒が溢れていたの二人はそれを避けながら他の一年教室の前を順に歩いてまわっていた。

「そつえばオレ達のクラスの担任になる赤島っていうやつ面白く

て面倒見のいい、いい先生だつて。この学校怖い先生が多いらしいからよかったな。」

そろそろ一年教室を三分の一くらいまわり終える所だった。新太は一瞬あの質問を試してみようかとも考えたが、何だか場違いな気がして、結局

「秋野君はこの学校のこと詳しいんだね。」

と当たり障りのない返事をしていた。

秋野はニツコリ笑って答えた。

「シンジでいいよ。オレも新太って呼んでるし。この学校のことと同じ中学の先輩に聞いたんだ。別に詳しいわけじゃないよ。」

「そうだったんだ。」

新太は答えた。

「でも……」

シンジはぼそつとつぶやいた。

「がっかりだったなあー。クラスの雰囲気は想像してたのと違うし、せつかく高校から新しい自分に生まれ変わろうと思ってたのに、そんな勇氣もどっかいったし。」

そしてシンジは続けた。

「自分が幸せになっている姿が想像できないよ。」

(えっ!!)

新太は驚いた。類は友を呼ぶとはこのことだろうか。自分が一番聞きたかったことを目の前にいる相手が言ってくれた。そして初めての仲間を見つけたと思い新太は少し嬉しくなった。

「キンコンカンコン」

ちょうど一年教室を見終わったところでチャイムになった。

「やべっ、早く教室に戻らなきゃ。」

そういうと新太とシンジは急いで教室に戻った。

「それではホームルームを始めます。」

教壇に立った背の高いほっそりとした教師がそう言うとき教室は静ま

り返った。

「えー、みなさんはじめまして。私はこのクラスの担任になった赤島といえます。年齢は秘密ですが、何と！ちょうどあと一ヶ月で誕生日を迎えます！プレゼントをくれる心優しい人が一人でもいると先生はうれしいですねー。」

そういうと赤島は教室を見回した。

（なるほど、これがシンジがさっき言っていた面白い先生か、つまらん…）

と新太は思った。受けを狙ったつもりだろうが、まだ学校に慣れていない生徒たちの中で笑うものはいなかった。

コホン、と軽く咳をして赤島先生は続けた。

「えー、初めて顔を合わせる人も多いと思うので、まずは自己紹介から始めたいと思う。出席番号順に秋野から始めてくれ。」

先生から指名されシンジは席を立てて笑顔で言った。

「秋野シンジです。出身中学は南中です。色々と迷惑かけるかもしれないけど、よろしく願いしまーす。」

それから次々と自己紹介をして行きあつという間に自分の番になった。

「東中出身の五十嵐新太です。本を読むのが好きです。よろしくお願いします。」

そういうと新太はすぐに椅子に座った。それから残りの人達が自己紹介をしている間はぼーっとしていたので、ほとんど聞かないままいつの間にか自己紹介が終わっていた。そのあとは先生から諸々の連絡、プリント配布があったあと、みんなで体育館に移動するため新太たちは教室から出た。

体育館に行く途中でシンジが話しかけて来た。

「新太って本を読むのが好きだったんだな。」そういわれて新太はそういえば自己紹介の時そんなこと言ったなあと思い出した。本が好き、とは言ったが、あれは一種の定型句のようなもので、実際は

他の人と比べて読んでいる量特別多いというわけではない。ああでも言わないと、他に言うことが無かったのだ。初対面の人たちに「自分と同じ種類の人間を探しています。」何て言えない。そもそも本が好きだったら、それがあの問いの答えになっている。

しかし、そんなことをいちいち答えるのはめんどくさかったので新太は「まあね」とだけ答えておいた。

「それにしても、あんまりパツとしないやつばかりだったなあ。」シンジは小さな声で言った。それは新太やシンジも同じだった。あんな簡単な自己紹介で自分をさらけ出す人はそうはいないと新太は思った。類は友を呼ぶと言う言葉を信じて新太は少し期待していたが、自己紹介だけでは自分の仲間がいるかどうか判断できなかった。新太が少し残念な気持ちになっているとシンジは続けた。

「やっぱり瀬戸内っていう双子は違ったな。近寄り難い雰囲気っていう感じ。絶対友達にはなれそうにない。」

自己紹介を聞いていなかったのでも言えなかったが、新太はとりあえず「同感だ」と言っておいた。

体育館に着くと他のクラスは既に整列を終えていて、新太たちのクラスが並び終わると、まもなく式が始まった。既にそのありがたみを失った校長の言葉から始まり、無くてもいいんじゃないかと思う、いろいろ面倒臭いことをしたあと、教室に戻り、その日は解散となった。色々と部活の勧誘があったが新太は全く興味がなく、そのまま学校をあとにした。

帰り道。

（そういえば今日からこの道が通学路になるんだ）  
と新太は思った。同じ制服の人もちろほら見かける。新太は電車通学だったので、駅に向かっていて。

（行き通ってみた時はそんなに複雑な感じはしなかったからすぐに慣れるだろう。近道とかあるんだろうか、あったらいいな。）

とか思いながら新太はとぼとぼ歩いていた。特に変わった様子のない普通の道だ。あえて変だといえばさつき変わった名前の汚らしい怪しい店があつたくらいか。そのまま駅に着いた新太はちょうど来た電車に乗った。

「扉、閉まります。」

そついうと電車は扉が閉まり、電車は動き出したのだった。

「あーあ、疲れた。」

新太はそついうとベッドに倒れ込んだ。今日はシンジと出会い、ほとんど一方的に話し掛けられたただけだけど、はじめて仲間（らしき人）を見つけた。

（クラスの雰囲気も何となくわかったし、これから楽しい学園生活が待っているといいな。）

と新太は思った。

「そーだ、明日から早速授業だった。予習終わらせなきゃ。」

そついうと新太は机に向かった。



## 一章 出会い - 2

あれから、新入生歓迎会、部活動勧誘等の行事を経て一年生はだんだんと学校に慣れていった。

新学期が始まって二週間が過ぎた。

新太は移動教室のため教科書等の勉強道具を持って理科室へ走っていた。

「近道じゃなかったのかよ！迷ったじゃないか！」

隣には秋野シンジがニヤニヤしながら走っていた。

「おかしいなあ…。確かにこっちの方が地図では近そうだったのに、位置的に。」シンジは残念そうに言った。

「やっぱりみんなについて行った方が良かった…。ああ！時間があと一分ちよつとしかない！」

二人は理科室を探して三階をグルグル回っていた。

「おい、五十嵐に秋野じゃないか、何してるんだ。迷ったか？」偶然通りかかった担任の赤島に二人は声をかけられた。

「はあ…。先生、理科室ってどこですか？三階ですよ？」

「ああ、理科室は三階だが、あそこの階段からしか上がれないんだ。」

赤島は窓から外を指さした。

「ホームルームで言ったはずだが、聞いてなかったな？ちゃんと次からは…」

「すいません！ありがとうございます！！」

二人は話を聞くとすぐに走り出した。

「ありゃー、廊下を走るなとも言ったはずだが…」

残された赤島はボソツと言った。

「はあ…。はあ…。お前のせいだぞ、シンジ。」

新太は息切れしながら言った。

「でも、まあいいじゃん。こんなことできるの一年の最初だけだし、いい思い出じゃん。」

「意味わかんないし、それに…うわっ！」

新太は階段を上がったところで、人にぶつかりそうになった。

「あ！ごめんなさい。よそ見してて。大丈夫？」

新太はぶつかりそうになった女子に謝った。

「こちらこそ、ごめんなさい…。気付かなくて…。」

彼女はそういうと新太の顔を一瞥し、そそくさと教室に入っていた。

「今の、瀬戸内さんじゃん…。何か話してたけど、どうかしたの？」  
遅れて追いついて来たシンジが尋ねた。

「いや…、ちょっとぶつかりそうになっただけ。心配ない。」

「そう…、ん？そこに何か落ちてる。」

そう言つてシンジが指差した先には白っぽい色の横線が数本入ったお守りの様なものが落ちていた。

「多分…さっき瀬戸内さんが落としたものだと思う。届けないと。」

新太はそれを拾いあげた。

（ん？何か小石みたいのが入ってる…）

まもなく授業の始まりを告げる鐘が鳴った。

「やべっ、早く教室に入らないと！」

そう言つてシンジが教室に入った。

（これは授業終わってから渡せばいいか…。）

新太はその落とし物をポケットにしまつて、教室に入ったのだった。

「……ということとで実験は終了です。ではレポートは明日までに出してください。今日はここまで！」

授業が終わると新太はすぐに前の方の席にいる瀬戸内さんの所へ近寄った。

「あの…これ、さっき廊下で落とさなかった？」

そついうと新太はさっき拾ったものを取り出した。

「……。」

瀬戸内さんは新太の顔と手を交互に見たあと不機嫌そうな顔をしながら、無言で新太の手からそれを受け取った。

「それじゃ、僕はこれで。」

そういうと新太はシンジと一緒に教室を出た。

「ね、どうだった？」

帰り際シンジがそう尋ねてきた。

「どうだったって、何が？」

「二人の反応だよ！」

「二人？何で二人？」

「双子だからだよ！黒板に向かって左に座ってたのが姉の冥ちゃんめいで右が妹の舞ちゃんまい。ちなみにアラタにぶつかった方は冥ちゃんの方な。」

「僕は左の子にぶつかったのか…あれ？」

新太はさっきのことを思い出した。新太は前の席に行って確か右の人に落とし物を渡した。

「しまった！！渡す方間違えた！」

「なんだと！」

どうりで渡す時反応が変だったわけだ。さっきのことを思い出して新太は恥ずかしくなった。

「まあ…双子だし…しょうがないだろ…。」

新太はそう開き直すことにした。

「間違えねえよ。冥ちゃんは優しそうな感じで、舞ちゃんはツンツンとした感じだし。それに舞ちゃんは髪むすんでたじゃないか。」

（そうか、二人にはそんな違いがあったのか。今までよく見てなかったから知らなかった。次からは気をつけよう。）

新太は心の中で静かに反省し、次に生かす決意をした。

「…ていうか何でシンジはそんなこと知ってんの？」新太は不思議に思っ

「そりゃーまあ、見てたからな、二週間。」

「…何で？」

「だってかわいいじゃん！やっぱそういう感情って大事じゃん。高校生活を楽しむためにも！」

「……。」

新太はどう反応すればいいのか困った。シンジのいう「そういう感情」というものに新太は疎かったからだ。

（てっきり、シンジは自分と同じ側の人間だと思ってた。同じと言っても考え方は違うものなのか。）

新太はちよつと残念な気持ちになった。

「でも自分のじゃないなら、何で受け取ったんだろう？」

「さあ？何でだろう？」

二人は理由を見つけられぬまま教室に戻った。

同じ日の放課後

「新太、一緒に帰ろうぜ。」

シンジは新太にそう言った。シンジも新太と同じ電車通学だった。

しかし、新太は

「ごめん、先帰ってて。ちょっと寄ってくところがあるから。」

と断った。

「そう、じゃあまた明日。」

そう言うとシンジは帰っていった。

（結局、謝れなかった。何か女子が集まって話し掛けづらい。また明日でいいや。）

それから新太はかばんを持って教室をあとにした。

新太が寄って行く場所、それは図書室だった。新太は時々図書室を利用していただった。

新太は図書室に着くとかばんから借りていた本を取り出し、カウンターに返した。そのあと新しい本を借りるために図書室をまわった。新刊コーナー、最近の小説が置いてある場所とまわり、奥の本棚に行くと、人影が見えた。

（ん？誰がいる。）

よく見るとそれはあの瀬戸内さんだった。

（どっちの方だろう。髪を結んでるから、瀬戸内舞の方が。ちょうどいいや、さっきのこと謝っところ。）

そういうと新太は彼女に近づいていった。

「あの…瀬戸内さん…。」すると彼女はこちらを振り向いた。

「何？」

「さっきは落とし物間違えて渡してごめん。双子だから見分けつかなくてさ、あれどうした？」

彼女は何か思い出すような仕種をして

「ああ…あれ、冥に渡しといたわ。私も同じもの持つてるから、あれ渡されたとき、最初、自分が気付かないで落としたものだと思って一応もらつといたけど、あとで確認したらちゃんと自分のあったし、冥の方は無くしたつて言つてたから。」

「へえ、そうなんだ。助かったよ。ありがとう。」新太はとりあえず落とし主のもとにあれが返ったことに安心し、安堵のため息をついた。

「そ、れ、と、今度から間違えないでよね。そのために髪結んでるんだから。」

彼女は新太をにらみ付けていった。

（やっぱり間違えたことは根に持つてるみたいだな。）

新太は苦笑いをして答えた。

「ごめん、以後気をつけます…。」

「ところで、あの中何が入ってるの。小石みたいだったけど。」

彼女は戸惑ったように答えた。

「…硫酸銅の…結晶…。」

「え？」

聞き慣れない言葉に新太は聞き返した。

彼女は意を決したようにいった。

「硫酸銅…まあ、正確には硫酸銅五水和物。化学式  $\text{CuSO}_4 \cdot 5$

H<sub>2</sub>Oで表される青色の綺麗な結晶。むかし冥と私と兄貴の三人で作ったことがあるの。あれにはその時できた硫酸銅の結晶のカケラが入ってる。初めてした実験だったから思い出として大事にとってお守りみたいにしてる。中学校の教科書に出てきたでしょう？硫酸銅。もっと詳しく知りたいなら、自分で調べて。」

「……………」

新太は返す言葉がなかった。

（忘れてた。そういえば彼女は学年トップクラスの成績を誇る双子の片方だった。）

新太は彼女が手に持っている本をちらつと見た。

「身の回りの科学」「科学の誤解を正す」…。

科学関連の本のオンパレードだった。

「科学…好きなんだね。」

新太がそういうと、彼女は顔色を変えて言った。

「なにいつてるの、わたし科学嫌いだから！勘違いしないで！」

そしてカウンターの方へスタスタと歩いて行った。

（…………？科学嫌いなのに、実験したり本読んでりしてるのか？理科の成績も僕よりも良いのに。頭いい人はよくわからん。）

カウンターの方を見ると、もう彼女はいなかった。

## 一章 出会い - 3

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

新太は自分の本を借りると図書館を出た。

（もしかしたら彼女は誰かに本を借りてくるように言われただけもしれないな。）

新太は無理矢理そう結論づけた。

（ああ、帰ったら宿題とか予習とかやらないといけないな。嫌だなあ。）

新太はスタスタと階段を下りてながらそんなことを考えていた。

（ん…？そういえばレポート提出しなきゃいけないんだった。教室に忘れて来た。提出期限は…今日だっけ？それとも明日だっけ？とりあえず取りに戻らなくちゃ。開いてればいいけど…。）

進行方向を変えた新太は教室に向かって歩いた。

「…ん？五十嵐じゃないか。またあつたな。また迷子か？」

担任の赤島だった。

「違います。図書室に行った帰りです。先生もよく僕に会いますね。どうかしたんですか？」

「いやー、私は常に生徒の味方だからね。いつでもどこにいても生徒が何してるかわかるんだよ。」

「それっていつでもどこにいても先生の目から逃れられないってことですか。…GPS機能付き携帯と同じですね。」

「…まあ、確かにな。その通りなんだが、何かもつといい反応の仕方があるだろう？ストーリーカードー！だの。何か言ってて恥ずかしくなってきた。」

「あ、何かすみません。恥ずかしい思いをさせてしまつて。」

「いや、気にするな、少年。それにしても読書とはいい心掛けだな。」

先生も高校生の頃、年に二冊ぐらいよんでたぞ。何せあの頃は他のことで忙しかったからな。」

「他のことって、まさか勉強ですか？」

「何だその、『まさか』って。安心しろ、オレは勉強じゃなくて○に忙しかつたんだ。」

そして先生は真剣な顔付きになって続けた。

「でもな、本は読まなくちゃダメだぞ。お前みたいな若者はこのオッサンと違って未来があるしな。いっぱい本を読んでいっぱい勉強しなくちゃいけないんだよ。…なんてな。こんなこという大人がいるけどオレはそうは思わないんだよ。」赤島は新太の方を見つめて言った。

「勉強なんて天才以外は楽しいなんて思わないだろ？この際だから言うが、そもそもオレは勉強なんてただ脳を鍛えるためにするもんだと思ってる。だからたとえ遊びであつてもそれに脳を鍛える要素があるならオレは遊びを否定はしない。それにたとえ勉強が出来なくても自分の信念を強く持つてる人をオレは評価したい。どんなにでたらめな考えを持っていても『オレが世界を変えてやる』ぐらいの気概を持った人がこの世界には必要だと思ってる。いいか、まわりに何と言われようと自分を貫けよ。」

そういうと赤島はさっさと去っていった。

（変な人だ…。わざわざ伏せ字にする必要ないよな、部活なんて。ていうか何部だったんだろう。）

新太は今言われたことの意味やそれを自分に言った真意をうまく理解できないまま教室へ足を速めていた。

教室に着いた新太は、開いていることを発見し、一息ついた。

（…開いてる。良かった。）

開けようとドアに近づくと、中から話し声が聞こえて来た。

（…ん？誰かいるのか？）

新太は気配を消して中の様子をうかがった。



「ねえ、冥。さつき図書室であの五十嵐っていう男の子に会ったんだけど。」

その声は瀬戸内舞のものだった。

「その男の子って私たち二人を間違えた人？」

「そう、ふつつ間違えないわよね。髪結んでるのに。」

どうやら瀬戸内双子の会話が展開されている様子だった。新太はさらにドアに耳を近づけた。

「それで、硫酸銅の話をしたら、『科学好きなんだね』、だって。

まあ、硫酸銅の話をしてさらにこんな本を借りてたら勘違いしてしようがないと思うけど、あのばか兄貴といっしょにされるのは何か癢に触るのよね。あの兄貴、頭はいいけど話してて疲れるのよね。何にでも科学的根拠だの定義だの厳密さを求めすぎ。普通に会話できないのかしら。やっぱここは徹底的に糾弾していくしかないわ。この科学という名の悪からみんなの目を覚まさせてあげるのよ！」

（科学という名の悪…だと？）

新太は意味が分からなかった。

「ねえ、舞。まだその話をしてるの？だいたい糾弾もなにも、一人じゃ何にもできないじゃない。まず仲間を集めなくちゃ。できればの話だけど。私は関わらないからね。」

「そのことについて考えたんだけど、その五十嵐って子を実験台一号にすればいいと思うの。」

（…何?!）

ただプリントを取りに来ただけが大変な話を聞いてしまった新太は困惑した。

「それ、彼に迷惑でしょ。それにあなたのいう崇高な計画っていうのをどう説明するつもりなの。変人扱いされて終わりよ。」

瀬戸内冥よ、よく言った、と新太は思った。そもそも科学嫌いといながら科学の本を読む時点で十分変人だ。

「いつだって革命者は変人扱いよ。まずは理解してもらえる人に理解されればいいわ。」

「そのあなたの思想を理解してくれる人は一体何人いるのかしら？」

「今の所私含めて三人ね。」

「…私と五十嵐君はもう決定なのね…。」

（勝手に決めんな！）

自分が彼女の理解者であると考える彼女の思考回路が新太にはわからなかった。

「私はともかく、五十嵐君には理解できないんじゃないかしら。」

「大丈夫よ。彼バカっぽかったし、おだてりやのってくるわよ。バカとハサミとのりは使いようだって言うじゃん。」

「最後ののりは聞いたことないわよ。」

「まあまあ、とりあえずスローガンは考えてあるから。『エンド・オブ・サイエンス』どう？ピツタリでしょう？」

「もう勝手に突っ走りすぎて、言い返す気も無くなるわよ。私は絶対関わらないからね、勝手にやって。」そういうと瀬戸内冥はため息をついた。

「まあ、そんな固いこと言わずに、それで決意表明はこんな感じでいいかな。『科学が発達した現在において、科学というものは絶対的な力を持っている。我々はこの力によって多大なる恩恵を受けると同時に、何か大切なものを失っているのではないか。人類は早くそれに気付くべきである。新しい生き方を目指すべきである。そして新たな世界を築こうではありませんか、我々とともに！』どう？ベシッ！」

「痛！何で叩くんだよ！」「あんたホントにそれでいいと思ってるの？それじゃ怪しい宗教団体みたいじゃない。それに私は舞の言おうとしていることはわかるけど、誰も寄り付かないわ、それ。もっとわかりやすくしなきゃ。あんたが一番したいことは何？」

「私は科学が嫌い。それで同じ考えの人を増やしたい、それだけよ。」

「つまり、『科学が嫌いな人を見つける、もしくは誰かを科学嫌いにして仲間にする』活動をしたいってことね。」

「そうそう、そういうこと。」

もしこの会話を盗み聞きしてなかったら、明日学校こんなこと言われても絶対わからなかっただろう。今も完全には理解していないが……。

「じゃあ、その本はどうして読んだの？それに勉強はどうするの？科学が嫌いなら理科とかボイコットするの？私はそれでもいいけど。」

「何言ってるの。そこはちゃんと公私の区別を付けるわよ。表向きは科学好きとして振る舞っておいて、裏で仲間探しを頑張る！それでまず敵（科学）を知ることから始めようと思って、この本を借りてきたの。」

新太はさっき先生がいったことを思い出した。

（こういうのを『オレが世界を変えてやる』という気概を持った人達っていろいろののかな……）

「はいはい、頑張ってるね。もう私帰るから。」

そういうと瀬戸内冥は席を立った。

（まずい！こっち来る！）

新太は急いで離れようとした。その時

……ガタッ

（しまった！）

……誰かいるの？」

瀬戸内舞がこちらを振り向いた。

「ちょっと私見てみる。」そういうと瀬戸内冥はドアに手をかけ勢いよく開けた。

ガラガラ……

目が合う瀬戸内冥と五十嵐新太。

「……よ、よう。」新太が苦し紛れにそういうと、瀬戸内冥はニタ―と笑って言った。

「ねえ、舞。さっきの話、話す手間省けたみたいよ。」

新太は今度は瀬戸内舞と目が合った。  
すごく嫌な顔をされた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1424z/>

---

生き方難民の証

2011年12月26日21時57分発行